値観を引き出し市民の共感を吸い上げる、ボトムアップ型体制の更なる構築が望まれます。

4.2 行政と市民のフレキシブルな協働を

「市民参加を促すための機会や場の提供」、「まちづくりに関心を寄せる場づくり」といった、“まちに市民の意思が通う環境”をつくることは、これからのまちづくりにおける社会的資産といえるでしょう。なぜなら、この社会的資産をもとにまちのグランドデザインを考えることで、市民とコンセンサスを得た長期的ビジョンをつくることができるからです。
そして社会的資産を充実させるためには、行政を起点に市民が軸となり、それぞれの意見が集約、調整される仕組みづくりの確立が望まれます。行政と市民によるフレキシブルな協働が、まちづくりの大きな推進力となるのです。

4.3 新たな価値の創出で継続するまちづくりを

まちづくり活動で最も重要なのは、“継続する”ことです。行政は市民をサポートする施策のもと市民に働きかけ、市民自らの力でまちの賑わいを創出する。それが本来目指すべき姿です。そのために人材の輩出やまちづくり教育、プログラム開発など、JIAも建築家の職能団体として、行政と連携して様々な面からバックアップを行っていきます。
既存の規制や制限に囚われない新たなルールの創出により、まちには新しい価値が生まれます。それらが浸透し、受け継がれ育まれ、やがては持続するまちづくり活動となっていくことを願います。

5 職能力の向上

5.1 地域に根差し、人と人を繋ぐ建築を

JIAの活動方針の一つに、地域に密着した活動があります。コミュニティアーキテクトの意義を深く理解し、その場所に根差して活動していくことが現代の建築家には求められているのです。
建築は人と人を繋ぐツールでもあります。多様性が求められる昨今、建築家は地域の特性を読み解き、如何に全体をマネージメントできるかが問われています。地域社会に目を向けた問題点の抽出、埋もれていたものの発掘、そしてそれらを融合する能力が必要とされているのです。

5.2 建築にとどまらないまちの資産を創る

まちの人々が長く使い続けていける建築ストックを増やすことで、今ある資産の価値を上げ、まちづくりの活性化を図る。それらはやがて新しい資産となり、人の記憶とまちの風景を構成していく。そして、少子高齢化に対応し、この資産を次世代へ繋いでいくことも重要な使命。そのようなまちを創出することが、安心で、安定した市民生活の基盤にもなります。建築家にも意識転換と、建築だけにとどまらない社会問題を直視したまちづくりの姿勢が求められています。

5.3 建築家は社会に如何に役立つか

今大会で、吉村大阪市長は建築家とは何なのか、単なる設計者とはどう違うのかについて、「建築家は思想を表現するもの」、「思想がしっかりしていればぶれない」と言われました。「建築家に行政、政治にも参加していただければ」とまで述べられました。建築家はその職能を意識し、足元を見つめ直して社会に貢献するという役割を担っているのです。
行政の責任、市民の責任、発注者の責任、職能である建築家の責任が問われる昨今、しかしまだまだ建築家も、旧来の経済主導型の価値観から抜け出せていない現状があります。今ある古いものを残し、その価値を見出すにはどうすればよいのかを考え、また、複雑化した現代では他分野とのコラボレーションの必要性を理解し、共同での社会資産づくりに邁進する必要があります。職能とは、社会に対し責任を負うことでもあるのです。

これからのまちのために

新しいことにのみとらわれるのが未来志向ではない。

昔、関西主要都市はそれぞれが役割を担い、全体が絡み合い活性化していました。これからは経済主導の旧来のやりかたでは成り立たないことは、この成熟社会において明白です。高度成長期における郊外へのスプロール化が進んだ末の人口減少の影響で、如何にそれを収束させ行政負荷を減らしていくかが大きな課題の一つとなっています。

大阪はどう繋がってきて、これからどう繋がるのか。

東京には及ばなかった経済力のおかげで、古い建物が多少は残った大阪のまちですが、やはりスクラップ&ビルドによるバブル景気の爪痕は深く残っています。残されているものと新しいものの融合による文化都市の復権を図り、もう一度、文化香るまちへの変貌を期待したいところです。

そのために、まず水の都大阪の、川のあるまちをどう活かすか。例えば建築の集団規定の見直しや、川に面するビルの所有者への優遇措置などを講じて、1階の一部を川へ向けて抜けの空間とするなど準公共化し、市民の憩いの場を確保する。そうしたことで新たな価値を創出し、狭いまちの閉塞感から開放したまちへと転換を図ることもできるでしょう。

また、大通りから一歩入れば、人の営みも感じるヒューマンスケールで心地良い空間が広がるような、そんな連続性のあるまちづくりも必要ではないでしょうか。ローカル性豊かでまぜこぜ感の溢れる大阪には、猥雑なアジアの良さが漂い、ばらばらでもなんとなく一つにまとまっているという魅力があります。そんなまちに住んでいることが面白い、あるいはそんなまちの魅力に惹かれて住まう。そうあるためにも、繁栄した時代を参考にすることが、“繋がっていく”意味なのかもしれません。

都市が栄えていくにはどうすればよいのだろうか。

都市にはそれぞれの文化があります。そのアイデンティティ（DNA）を基軸とし、地域特性をクローズアップさせることが、都市が栄えていくためには大切な要素です。もともと民力の大きい大阪において、民間の力を活かすことも必要でしょう。若い人を中心とした新しい価値観を創造するための教育・研究環境づくりも急務です。多様性（ダイバーシティ）を受け入れながら大阪ならではの魅力を再確認し、独自性が活かされた個性豊かなまちづくりが重要と思われます。

各地域の緑化計画や広域連携型の交通ネットワーク構築なども検討されており、産業相互関係をはじめパラレルな都市間連携による地域活性化に期待が高まっています。一方で、様々なコミュニティをはじめ、関西の府県間によるローカル重視の新しいネットワーク化が急がれます。大阪はそのキーステーションになれるのではないでしょうか。

吉村大阪市長は「大阪のまちを変える」を原点に、「街並みというものを考えたとき、人を惹きつけるのは建築であり、建築は未来永劫重要な要素である」と言われました。行政の活動は通常、社会活動のバックアップとリードの両輪ですが、「これからのまち」を創造する上で行政も創造性・革新性の向上を図り、ロングスパンのマスタープランづくりに取り組む必要があります。リーダーはときには平等性をも超越した強い姿勢で判断する時代がきたのかもしれません。

ここに述べた5つの提言が、より豊かな暮らしが溢れるこれからのまちづくりに少しでも役立ち、次世代に繋がる一歩となれば幸いです。

JIA近畿支部 提言書作成会議
松本 敏夫 ｜ 井上 久実 ｜ 岩田 恵 ｜ 栄 隆志 ｜ 木村 貞基

発行
(公社)日本建築家協会 近畿支部
大阪市中央区備後町2-5-8 綿業会館4F　TEL:06-6229-3371
http://www.jia.or.jp/kinki/

公益社団法人　日本建築家協会近畿支部

これからのまちづくりへの提言

PROPOSAL

文化力の向上
都市力の向上
市民力の向上
行政力の向上
職能力の向上

公益社団法人 日本建築家協会
The Japan Institute of Architects

大阪。そのアイデンティティを継承するまちづくりの未来
-JIA建築家大会2016大阪を開催-

2016年10月、公益社団法人日本建築家協会近畿支部の主管によりJIA建築家大会2016大阪を開催しました。

「笑都物語～繋いできたもの　繋いでゆくもの～」をテーマに掲げた今大会では、大阪をはじめとした弱体化する地方都市の復活を目指すこと、グローバリゼーションという名の下に均一化しつつあるまちの風景を、地域ごとの個性や活気に着目したローカリティへの視線から見つめ直すことを訴えました。中でも、本来の大阪が持っていた“生活の知恵”としての「笑いの文化」に注目し、そこに現在の閉塞した状況を“明るく突破する”可能性が見出せるのではないか--。そういった可能性を一人一人の建築家が社会に発信していくことに、大きな意味があると考えました。

そしてこの議論を私たち建築家の中だけで閉じるのではなく、産・官・学・民の各分野で問題を共有するかたちと共に、元気で豊かな『生きるまち』を考える機会としました。

大阪×建築家から、5つの提言を発信

1 文化力の向上

1.1 文化のストックを まもり活かす

大阪には芸能、工芸、建物など過去の様々な時代から受け継いできた豊かな有形・無形の文化ストック（文化遺産）があります。先人から受け継いできたこれらのストックをまもり次世代へ繋いでいくことも、生きた文化として私たち市民がそれらを実際に使い、楽しむことが、大阪の文化水準を引き上げます。
歴史的文化的に価値のある建築物の保存・再生に、技術と経験をもって建築家が取り組むことで、文化に溢れた豊かなまちをもりします。

1.2 景観の文化度を上げる、水と緑溢れるまちに

都市の中の水や緑は、豊かな景観を創り出し、そこに生きる人々に憩いと癒しをもたらします。しかし残念なことに、現在の大阪は他都市と比べても緑が多いとはいえません。また、かつては縦横に流れる川や運河を母が行き交い、水の都ならではの景観も高度成長とともに次々と道路が整備され、すっかりその姿を変えてしまいました。
しかしながら近年、大川沿いの中之島の景観を活かす整備やイベントなど、水の都の復権をめざした新たな試みも動めでいます。私たち市民や企業も、そそぐ光が身のまわりの緑を増やす努力を求められています。水と緑に象徴される「景観の文化度」は、都市の文力を測るバロメーターです。私たち自身の手で、自分たちが誇りに思える都市景観を実現していきましょう。

1.3 多様な人々と文化を受け入れ交流する

江戸時代、全国から物資が集められ、天下の台所と言われた大阪のまち。様々な人や文化が共存し、このまちはかつからそれを受け入れてきました。近年では、海外からたくさんの観光客が大阪を訪れています。多様な人々を受け入れる大阪の気質を活かし、彼らを歓迎し、このまちの魅力を伝えることで文化交流を進めていきましょうそのような多様性の中で共存共生することで、新しい大阪の文化がまたひとつ、芽生えるかもしれません。

2 都市力の向上

2.1 魅力を活かし、共存共栄できるまちに

近年、各地で大型ターミナルの進出によって近隣商店街の衰退が進んでいます。商店街が衰退すれば、まちの活気は失われていきます。しかし、ただ衰退を待つのではなく、地元に根差した商店街の特色を分析しその特徴を活かすことで、大型ターミナルには決して真似のできない事ができるのかを実際に使い、楽しむことが、大阪の魅力を創り出すことにつながります。

2.2 多世代が共に暮らす、活気あるまちづくりを

近所に保育園ができるのは迷惑だ！と近隣住民が建設に反対し、ニュースになりました。しかしながら、超少子高齢化社会の日本では、子育て世代を近隣の人々が関心を持って見守り、若い世代が安心して活躍できるまちづくりの必要性が高まっています。一方で、かつて広い土地を求めて郊外に移転していった大学キャンパスは、最近になってその多くが都心に立地することの価値を見直し、まちへと戻ってきています。都心にキャンパスが戻り若い世代の生活が戻ることで、まちの中には多様な世代の共存が生まれています。
世代間の対立や、世代ごとに切り分けられた生活ではなく、多世代が支えあい、共存できる活気のあるまちを創っていきましょう。

2.3 人とまちの魅力を伝える発信力を

大阪の特色は何か、と聞かれるとまずは花の名前を挙げる人が多いのでは？ツツジ、ヒヨドリバナ、ヒヨドリ、ヒヨドリの服を着た おばちゃん！ワーかっこいとか…。これでは大阪の本当の魅力が発信できているとは言えません。大阪人の他人と垣根をつくらない人懐っこさ。困った人を助け る情の深さ。そして一緒にいてほんわか幸せな気持ちになる温かさ。
こうした大阪人が得意とするコミュニケーション力を活かして、たくさんの人が大阪に関心を持ち大阪に来たい、住みたいと思えるような魅力をもっと発信しましょう。大阪の人々の魅力は大阪にいまちの魅力でもあるのですから。

2.4 人が繋がる 新しい豊かさを求めて

近年、大阪からはまくの企業の本社が流出し、法人税収も減少かつてのような企業による文化事業への貢献が難しくなっています。確かに、経済的な豊かさはあるかもしれませんが、世代や地域を超えた人と人との繋がりや、多様な人々が共生することの価値に気づけば、今までは違う豊かさが社会に生まれるのではないでしょうか。学生たちは、文化的な活動や、まちづくりに参加することで、新しい豊かさの提案を目指します。経済力一辺倒ではなく信し、新しい豊かさの提案を目指します。そのためにも、市民と共に汗をかき、さらに一人一人の建築家が意識を高めて社会に発信していくことが必要です。

3 市民力の向上

3.1 まちづくりへの参加意識を上げる

ては、私たちが本当に暮らしたいと思えるのは、どのような「まち」なのでしょうか。職場に近く、買い物が便利で環境も良く、子育てがしやすい、なんなどっこいまくを求めてしまいますが、そのようなまちは家賃や土地の価格も高く、決して身近ではありません。私たちが市民がまちづくりに無関心でいると、まちはさらに経済優先、機能優先になってしまいます。私たちが本当に望んでいる、楽しく、心地良く暮らせるまちにしていくには、私たち自身が声をあげ、行政に働きかけ、自分たちの「願い」を届けるが必要があります。まず私たち市民が、まちづくりへの参加意識を向上させていくことが大切なのです。

**3.2 まちづくりへの参加意識はあって も、実際に行動するとなると何をすれば いいのかわからないかたい、億劫だ とり、そこで必要となるのが、「ワーク シャルデザイン」です。社会的な課題の解決と同時に、新たな価値を市民自ら創出する…。簡単に言うと、明るい未来を自分たちの手で創っていこうという考え方です。
私たち市民は、自分たちの周りから世界を変革している力を自由を持っており、その自由をもってもを様性のある社会を目指す取り組みができるのです。たとえば虐待されている子どもたちに手を差し伸べたり、ホームレスの方に仕事をつくってあげたりいった活動が、すでにあちこちで行われているように、価値観の多様性を認め、たくさんの選択肢のある暮らしができる、それが自分の居場所を見つけ、居心地の良いまちをつくることに繋がるのではないでしょうか。

4 行政力の向上

4.1 広く窓口を開放し、市民に寄り添う行政へ

“物の時代”から“心の時代”へと社会が移行しつつある今、まちづくりには、人に寄り添う視点に立った計画と、それを実現する計画的手法の重要性が増しています。また、産官学産が一体となって、「暮らし」と「文化」と「まち」が繋がる活きまとしたまちづくりを行うことが大切です。
そうした中、行政にはより柔軟できめ細かな役割が期待されています。市民に窓口を広く開放し、まちの中に潜在しているみんなの想いや多様な価